

国語科における指導の重点（身に付けさせたい力）※学習指導要領に照らし合わせて			
	ア 知識及び技能		イ 思考力、判断力、表現力等
社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の言語文化に親しんだり理解したりすることができるようにする。		論理的に考える力や共感したり想像したりする力を養い、社会生活における人との関わりの中で自分の考えを広げたり深めたりすることができるようにする。	

	児童・生徒の学力の状況（課題）	授業における具体的な手だて	成果検証（2月）
第1学年	ア 小学校レベルの漢字や日常的な語彙が分からないなど基礎・基本が定着していない。（漢字テストでは点数が取れる生徒も、文章を書く際に課題が見られる。） イ 教科書の内容理解に時間がかかり、自分の考えを持つところまで至らない生徒が多い。	ア 小テストをこまめに実施し、定着を図る。また、自分の手で文章を書く機会を設け、その都度訂正する。 イ 本文の穴埋め形式の問題など、基本的なところから行い「わかった、できた」という感覚をつかませながら進めていく。	ア 市学力調査【知識・技能】 イ 市学力調査【思考・判断・表現】 所見
第2学年	ア 文の成分や品詞など、文法に関する基礎的な知識が十分に定着していない。 イ 文章の内容を正確に捉え、根拠を明確にして自分の考えをまとめることに課題が見られる。	ア 文章を読む際に、単語を取り上げ、「どの品詞か」「文中でどのような働きをしているか」を考えさせる活動を継続的に行う。 イ 記述問題では、「①自分の考え→②本文中の根拠→③根拠から分かること」の順に整理してから書かせるようにする。	ア 市学力調査【知識・技能】 イ 市学力調査【思考・判断・表現】 所見
第3学年	ア 小学校中学年から漢字が書けない、日常的な語彙が分からないなど、基礎・基本が定着していない生徒が多い。 イ 思いのままに話す、書くなど分かりやすいように伝えられなかったり、書くことに苦手意識があったりする生徒が多い。	ア 新出漢字や文法を含め、ことわざなど意味や文、使用場面を提示し、自分で扱う中で学習させ、小テスト等を実施して定着を図る。 イ ディスカッションやスピーチ、意見文を書かせる学習活動を行う。その際に、話型や文章の型、書き出しの例を示すなど型の定着を図る。	

■「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に向けた一人1台端末等 ICT の効果的な活用について	■学習の見通しをもたせることや学習を振り返ることの工夫等、「学びに向かう力」の育成に向けた取組について
1年:ICT を活用し、自分に合った方法を選択して学習する。 （例えば、教科書の本文か AI で要約した文章かを選択して課題に取り組むなど。） 2年:自分の考えを入力して、他の人と考えと比較する。 3年:学習テーマに対して、生徒一人一人が自分の個性や経験に応じて考えをまとめたり、互いの考えについてアドバイスし合ったりする場面などで活用する。	1年:授業を展開する教師が生徒とともに既習事項(パターン課題)と新たな学び(ギャップ課題)のつながりを意識しながら単元を進めていく。 2年:授業の導入で、学習の目標や身に付けたい力を具体的に示し、生徒が学習の見通しをもって活動できるようにする。 3年:単元の最初に既習事項を生かした学習目標を設定させる。単元の最後に目標と取り組んだ結果を照らし合わせ、学習を振り返らせる。

算数科・数学科における指導の重点（身に付けさせたい力）※学習指導要領に照らし合わせて			
	ア 知識及び技能		イ 思考力、判断力、表現力等
基礎的な概念や原理・法則などを理解するとともに、事象を数学化したり、数学的に解釈したり、数学的に表現・処理したりする技能を身に付けるようにする。		事象を論理的に考察する力、数量や図形などの性質を見出し統合的・発展的に考察する力、数学的な表現を用いて事象を簡潔・明瞭・的確に表現する力を養う。	

	児童・生徒の学力の状況（課題）	授業における具体的な手だて	成果検証（2月）
第1学年	ア 小学校の内容（九九、通分や約分など基本的事項）が身に付いていない生徒が多く、中学校で新たに学んだ正負の数の概念は理解出来ていても先述した部分の理解が乏しいため、正答に辿り着かないことが多い。 イ 計算問題には、正答誤答関わらず大方取り組みはするが、文章題等の思考力や判断力を問う問題になると、無回答の生徒が増える。	ア 毎回の授業の導入5分間で計算練習を行う。 イ 文章題の解き方、考え方、ポイントなどを整理しながら、1回の授業で1パターン（例題1種類）だけ進めるなど、生徒が混乱しないように工夫し、理解を図る。	ア 市学力調査【知識・技能】 イ 市学力調査【思考・判断・表現】 所見
第2学年	ア 1学年で学習した内容について、十分に理解・習得できていない生徒が約2割いる。 イ 文章問題に対して苦手意識をもち、問題文の長さを見ただけで諦めてしまう生徒が約7割いる。	ア 1年生の既習内容を含めた5問テストを毎時間実施し、生徒一人一人のつまずきを把握するとともに、自身の課題を自覚できるようにする。また、学び合いの場面を設定し、生徒同士で教え合いながら基礎・基本の定着を図る。 イ 教科書や問題集の文章題について、問題文の読み方や着目すべきポイントを丁寧に解説する。問題文を整理しながら考える方法を繰り返し指導することで、文章の長さだけで諦めることなく、自ら問題に取り組める力を育成する。	ア 市学力調査【知識・技能】 イ 市学力調査【思考・判断・表現】 所見
第3学年	ア 作図や確率など、計算だけの問題と比較して正答率が低い。 イ 応用問題を解く際に、どの知識を用いればよいかを考え、判断することが難しい。	ア 定期考査ごとにテスト問題として出題し、直前の授業でやり方を確認する。忘れることがないように繰り返し行えるよう工夫する。 イ 教科書や問題集の応用問題を取り扱い、出来るだけ多くの問題に触れ、問題を解くための見通しを立てる練習をする。	

■「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に向けた一人1台端末等 ICT の効果的な活用について	■学習の見通しをもたせることや学習を振り返ることの工夫等、「学びに向かう力」の育成に向けた取組について
1年：各単元末に「ネットレ」の時間を1時間設定し、各自それぞれが現状の自らの課題に合った問題を選択し、解き進めることが出来るよう活用している。 2年：「学びポケット」の学習ノートを活用し、学習内容を記録するとともに、振り返りを通して自分の苦手分野を発見できるようにしている。 3年：2次関数の傾きや切片の値を変え、グラフがどのように変化するか確かめ、式・表・グラフの関係性を理解する。	1年：数学教室を活用し、今後の授業で学ぶ範囲を常に提示している。定期考査時には「やり直しレポート」を課題にすることで、解きなおし、振り返りをする。 2年：数学評価シートを利用し、毎時間の授業を振り返りができるようにしている。 3年：数学教室を活用し、今後の授業で学ぶ範囲を常に提示している。家庭学習プリントを用いて、解きなおし、振り返りをする。